岡崎宿二十七曲り今昔

合名会社備前屋
代表社員　中野敏雄

本日は大勢の方に私の話を聞きに来て頂きまして誠に有り難うございます。又、皆さんが郷土の歴史に興味を持って下さっている事を大変有難く思っております。話の途中で時々横道に入ってしまう時もありますが、お許しを頂きたいと思います。

昨今、岡崎の通称「二十七曲り」を、リュックサックを背負って歩いていらっしゃる主に年配の方々が多く見られます。いずれの方も岡崎の町に関心を持って頂き大変感謝をしておりますが、戦前の岡崎の町の姿を覚えている私にとりまして、六十三年前の戦災ですっかり変わってしまった現在の岡崎の町を歩いて頂いても、昔の東海道三十八番目の宿場である岡崎宿と五万石の城下町をイメージして頂く事は出来ないのではないかと、心配しております。

岡崎の町並みが「二十七曲り」と呼ばれるようになったのはいつ頃からだろうかと調べてみますと、江戸時代の名所記『東海道名所絵図』には「城下の町員六十余町、二十七曲りと言ふ、当国都会の地にして、商人多く、繁盛の所也。」とあります。

又、有名な蜀山人・太田南畝の『改元紀行』には、「岡崎の賑わいは駿府（静岡市）に次ぐ、町数五十四町、二十七曲りありとぞ、矢作の橋の長さ二百八間」とも言っております。これらの事から、当時から二十七曲りと言っていたことは間違いありません。

その他にも江戸時代の岡崎の賑わいは、井原西鶴の著書に「城は左の方にあり、町作り都めきて万の商人ここにあつまる、この宿に遊女ありて…。」とありますし、東海道五十三次の浮世絵を描いた歌川広重や、ドイツ医師のケンペルやオランダのシーボルトは旅日記の中で岡崎・材木町の職人の事を取り上げております。又、幕府が岡崎まで迎えの使者を出していた「朝鮮通信使」が岡崎の事をいろいろと語った記録が残っておりますが、これらに共通して登場するのは「矢作橋と岡崎女郎衆」の事です。日本一長い橋であった「矢作橋」と宿場の飯盛女が「岡崎女郎衆」と呼ばれた事は、東海道を行き交う「文人墨客」の旅日記には必ず記されております。

さて、それではどこから「二十七曲り」が始まり、どこまでを「二十七曲り」というかと言えば、実ははっきりとは解りません。又、実際に二十七カ所も曲がり角があるのだろうかと言う疑問に対しても、「二十七曲り」と三百余年前から言われておることは確かですが、長い歳月の間に町並みも度々変わっている事から「二十七」という言葉は、大変曲がり角が多いと言う事を意味する表現であり、単なる語呂合わせと言って宜しいかと思います。

もし、こういった道筋が昔のままであったらと想像しますと、現在の車社会では大変不便であり、とても道路として機能しそうもありません。これらの道筋は岡崎市が戦災に遭わずにそのまま保存して観光資源として生かせたら素晴らしかったと思います。当然、街の発展は又別なところに求めていくことになったでしょうが、現に古い町並を保存して観光地になっているところは幾つもありますので、近代的な街のショツピング街や工業団地は別な場所を選んで発展する事も可能であったかと思います。

しかし、皆さんもご存じのように岡崎市は今から六十三年前の昭和二十年七月十九日夜半より二十日に掛けて、旧市街の八割が米軍のＢ２９爆撃機によって焦土と化しました。当時、国民小学校六年生であった私は燃えさかる火の中を逃げまどい、八月十五日の終戦を父が地所を所有していた高隆寺町のお寺の離れ家で迎えました。

現在、そのあたりには岡崎市民病院や美術博物館、中央総合公園がありますが、当時は全くの山と山間の田んぼだけの所でした。ご存じの方もあるかと思いますが、高隆寺は昔は七堂伽藍のある大きな寺であったそうです。又、この高隆寺は今回の「二十七曲り」の成り立ちと直接関係のある当時の岡崎城主である「田中吉政」の命令に従わず、攻められ僧兵達は殺され、寺は焼かれ、焼け残った木材は岡崎城の台所の資材として使われたと言われております。

私には戦争が熾烈になる前のまだ良き時代であった伝馬町の記憶があり、当時小学生になったばかり私には日本中が２月１１日の紀元節(現在の建国記念日)の日に「紀元二千六百年」を祝う提灯行列が行われたのを覚えております。

備前屋は当時「脇本陣かぎや」の東隣で、そこに私と同年の子がおりましたのでよく遊びに行き、昔の旅人がそこでわらじを脱ぎ足を洗ったであろう、長く広い磨き込んだ式台や長い廊下を走り回った記憶があります。又、記録を調べていく内に明治天皇が東京に遷都なされる途中、岡崎の服部本陣にご宿泊なさった時の部屋の調度が、服部本陣が閉鎖したときに脇本陣「かぎや」に移されて大切に保存されていことを後で知りました。

私は２０年ほど前に両本陣の子孫の方を探して訪ねていき、その方達に（８０才位の方でした）汽車の開通した為に宿場に宿泊する人がまったく無くなり、宿場としての町が崩壊した頃の記憶を思い出して頂き直接伺いました。（もっとも本陣が閉鎖された頃は、お二人とも幼い子供でした)。服部本陣の末裔の方からは、明治天皇がお酒を飲まれたカワラケとお髭の無いお写真や当時の新聞を見せて頂きました。

私の子供の頃の伝馬の道幅は約４間（８m）位であり、時たま通る牛車や馬に気をつければ、道の向かい側の家に遊びに行くのは何ら危険なことではありませんでした。

私の子供の時(昭和十四年頃・当時七才)の記憶では、夏の夜になると店の前の通りに縁台を出しそこで将棋を指しているような、全てがのんびりして良い時代であったと思います。ラ

オ屋(タバコを吸うキセルを掃除する)の屋台のピーという音を今でも覚えております。キザミ煙草は敷島・朝日・巻きタバコはゴールデンバットでした。

そのうち何人かの店の若い奉公人さん達が戦地に出征していき、写真になって帰ってきました。戦死をしたと聞かされました。戦争が苛烈になり、どんな商売も物が無くなれば商売を続けることが出来ません。このお話は又、別な機会にさせて頂きたいと思います。

だんだん横道にそれていきますので本題に戻ります。江戸時代ではどこの宿場でも問屋場があり、宿駅の業務を仕切っておりました。宿駅の問屋場の仕事は大変複雑な仕事であり、相当な能力が必要とされたと思います。そこで幕末の伝馬宿で最後の問屋場の長であった旅籠屋（武蔵屋）の御主人の「三橋弥太郎」さんの事を調べさせて頂きました。子孫の方は私より一つ年上で、子供の時に同じ町内でしたので一緒に遊んだ人であり、現在は亡くなられておられます。この方の奥様はご存じの方も多いと思いますが、現在「竜ヶ丘会館」の乙川河畔の菅生川堤防に「葵桜」の並木を作られた三橋美千子さんです。

三橋さんのお宅に伺い調べていくうちに「三橋弥太郎さん」は、岡崎の初代郵便局長とわかり、幾つかの貴重な資料を見せて頂きました。又、岡崎市の学芸員の方にも来て頂き、三橋さん宅に伝わっている記録を調べさせて頂きました。又、旧岡崎郵便局では現在の場所へ移転する際の催しとして三橋美千子さんに一日郵便局長になって頂き、同時に旧郵便局で明治時代の資料の展示を行いました。

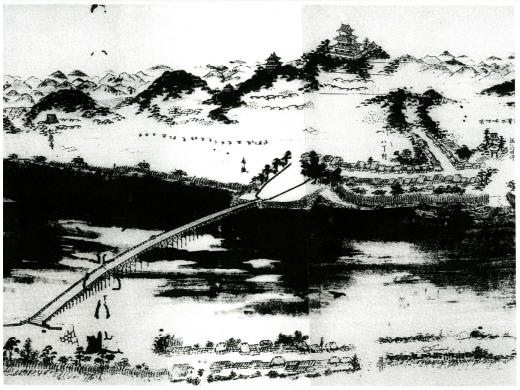
日本の郵便制度の創始者が「前島密」であることはテレビでも放映されたことがあり、ご存じの方も多いのではないかと思います。問屋場は今で言えば JR の駅と郵便局・銀行や宅配便を一緒にしたような存在で、絶対に間違いは許されない仕事で、気の休まる暇もない過酷な仕事ではないかと想像できます。信じられないような事ですが江戸時代に江戸－大阪と為替取引が出来たのは問屋場による飛脚通信業務ができるようになったからであります。商いには信用が第一であり、江戸時代にはそれが今以上大切にされていた事は容易に想像出来ます。江戸時代の貨幣制度・経済の仕組についてのお話は、また別な機会にさせて頂きます。

ここで江戸時代の岡崎宿伝馬の成り立ちについて少し述べさせて頂きます。江戸時代の岡崎宿伝馬が東海道の三十八番目の宿場として設立されたのは、徳川家康が全国を制覇して「伝馬制」を布告（１６０１）してからであります。それより前（１５９０）家康が関東に転封された後の岡崎城主になった「田中吉政」によってそれまでの主要街道であった鎌倉街道を岡崎の城下に引き込み、現在の「二十七曲り」と呼ばれる元となりました。東海道の松並木の街道(欠村)より投町・両町・伝馬宿に入り、長く続いている宿場町を通りますと、問屋場と岡崎藩のある迎賓館「ご馳走屋敷」から籠田総門より岡崎城下に入ります。岡崎の城下町は連尺・材木町・下肴町・田町・板屋町・松葉町（松

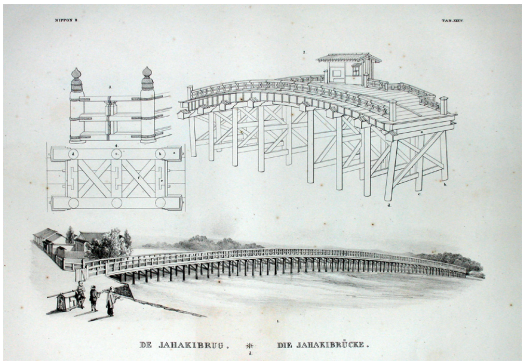
葉総門）を通り、八町村を通って矢作橋に至ります。

八丁の名前につきましてはお城まで距離にして八丁あるところからついたと言われておりますが古地図には八町としてあり、八つの町が併合して出来たとも云われます。岡崎に曲がり角が非常に多いのは、一説には東からの敵に備えて複雑な道を作った為とと伝えられております。実際には岡崎城の南を通っていた鎌倉街道を城の北側に沿って大きく迂回したために曲がり角が多くなったかも知れませんが、東の仮想敵国と云うのは、秀吉によって駿・遠・三・甲・信の五カ国より関東に封じ込められた「徳川家康」になります。

関東からの道は尾張は福島政則、岡崎は田中吉政、吉田（豊橋）は池田輝正、浜松は堀尾吉晴、掛川は山内一豊、駿府（静岡）は中村一氏、等々いずれも豊臣恩顧の武将を配しております。しかし秀吉亡き後は東海道の諸將は自家の保全を第一に考え家康（東軍）に味方をし、関ヶ原の戦いに参加したことは皆さんもご存じの通りです。



矢 作 橋 図　　東京都立大学所蔵



田中吉政は西軍の大将である石田三成を捕らえた功で岡崎から九州の柳川・久留米の三十二万石の大々名となり、替わりに家康譜代の家来「本多康重」が岡崎の城主となります。康重は田中吉政が手掛けた矢作橋の架橋を完成しますが、橋はまもなく大水のため流され、この時に矢作川東岸の八帖・田町・板屋町に住む人達に多くの被災者が出たと言われております。被災した人で八帖町に住む人達は新しくできた岡崎宿伝馬の北側に移され、南側には榎町（祐金町）の人達が移り住んだと言われております。

昔からの宿場は岡崎にあっては矢作川の両岸にありました。街道を旅する人達は川が増水した時は両岸で川の水が引くまで、何日も宿泊することを余儀なくされていたからであります。矢作橋が出来れば川の両岸にある宿場は必要が無くなり、新しく整備される「東海道」はこれから二百六十年間の長きに亘り「徳川幕府」を支えていく重要な基盤となっていきます。

岡崎宿は「伝馬制」によって次第に整備され、東海道五十三宿中でも戸数では七番目、本陣・脇本陣・旅籠数では三番目と言われる大宿となります。現在、東海道五十三次と言われておりますが、スタートとなる江戸日本橋とゴールである京都の三条大橋はカウントされておりません。皆様のところへ配らせて頂いた地図は、現在残っている岡崎宿伝馬の「文政九年正月改」（１８２６）の家順間口書と十数年後の職業を記したものとを併せて載せてあります。この「家並図」は約百八十年余前の地図ですが、「家並図」

に描かれていて現在も住居している方は約三百軒の内、数軒しかありません。その中でも今も同じ職業を続けている家は火薬鉄砲を扱っています「大黒屋」さんと「備前屋」だけです。又、漢方薬の大黒屋さん(江戸時代からある大黒屋の漢方薬部門の分家)と肉の永田屋さんは明治に創業された方々ですが、こちらも戦災（昭和二十年）を免れて残った数少ないお店です。

岡崎の町の中でも江戸時代の宿場である伝馬町の家数・人口は飛び抜けて多くなっており、特に極端に女性が多くなっております、この事は「宿場」である上伝馬町には旅籠が集中し、接客の女性（岡崎女郎衆）が多かったことによります。江戸時代前もこう言った宿駅制度はあったわけですが、主として公用としての制度であって一般の旅人とは無縁なものでありました。

徳川幕府が成立してから整備された五街道（東海道・中山道・甲州街道・日光街道・奥州街道）は江戸を中心として作られたものですが、室町幕府の時は京都が政治の中心であり南海道･西海道など京都から出る「七つ口」と呼ばれる街道がありました（室町幕府末期･応仁の乱の発端となった日野富子が七つ口で関銭を徴収し栄華を誇った話は有名です)。東海道も公用（幕府）が主体ですので、公用の使いは宿場の本陣に止まり宿泊代は払ってはおりません。それぞれの宿場は役目（義務）を果たすために大変な負担があり、宿場だけでは負担できないので街道沿いの周りの町や農村で負担（助郷）を分け合っておりました。

宿場はその規模によって馬の数、人足など決められており、岡崎宿の場合も他と比べ大きな宿場町でありますので、次第に負担が増えて馬八十匹・人足は二百八十人余りが義務づけられるようになります。伝馬町以外にも連尺町、材木町には問屋場が設けられた時もあり、時代によって問屋場の場所は変わっております。伝馬役を受けた町や助郷はその分だけ地子銭（税金）を免除を受けておったようです。

岡崎の「二十七曲り」は宿場と城下町から成り立っております。東海道は全て幕府の直轄地でありますので、城下町や宿場の街道で事件が起これば裁判権は幕府（江戸）の道中奉行の管轄になり、裁きは江戸に持ち込まれます。実際、記録に残っている幾つかの事件がありました（鯛飯騒動・飯盛女変死事件・・・)。

宿場町を通り籠田総門からは岡崎の城下町になります、連尺町は商人の町であり、宿場であった伝馬とは気質が違い連尺の人達は「連尺の衆・籠田の人・伝馬の奴」と言っておりました。これは伝馬に対しての侮蔑で、連尺の気位の高さを表したものです。

「連尺」という言葉は商売人が商いをするために背負っている背負子を指すものであって商人の町を象徴する名前と言えます。又、江戸時代の岡崎の文化を作った文人、岡崎藩に寄与した商人達も連尺・籠田から出ております。岡崎の町の名前はその成り立ちや性質に起因する物が多いのも江戸時代の特色でもあります(江戸も大伝馬・小伝馬・御徒町・日本橋・佃島・等)。

連尺・本町・康生町(明治になってからの町名)は殿町とも言われ、多くの武士の住まいも有り、城内であり岡崎としては一番古くから開けたところと言って良いと思います。町の戸数・人数は伝馬町が際だって多く、享和年間では約三百戸・一千人、旅籠・木賃

が百四十軒となって宿場町の特徴が出ております。材木町が百八十戸・七百人で鍛冶屋・指物、大工･桶屋が多く職人町であることがわかります、連尺町が百二十戸・四百人、籠田町が百十戸・三百人で古手屋・小間物･呉服屋･薬屋等、商人の町であります。意外なのが各町に「タバコ屋」が多いことです。

なんと言っても岡崎が大きく変化したのは明治維新で文明開化になったときからであると思います、伝馬町は東京新橋から汽車が開通した影響で壊滅的な打撃を受け、中根・服部の両本陣も無くなり、他の旅籠屋も同様です。何しろ汽車に乗ればその日のうちに大阪まで行けるのですから。

「岡崎女郎衆は良い女郎衆」と東海道に名を広めた名残は明治となりますと花柳界として芸者衆百二十名を擁しておりました。料亭も数多く周囲に芝居小屋・映画館・お寺参り（六地蔵の蓮如さんと門前町の隨念寺）で岡崎一番の盛り場になりましたが、突然の県知事の命令で花柳界が中町に移され、岡崎の盛り場は次第に連尺・康生・本町に移行していきます。国道一号線が出来、曲がり角が多かった「二十七曲り」も直線的な道になり、康生町は鉄道馬車が出来た為一番交通量が多く、それと比例して商店も多くなり岡崎の繁華街となっていきます。

私が二十才代の時にはまだ国産乗用車が出始めたところでありまして、今の国道１号線は市外に出ると、まだ昔の東海道松並木であり、砂埃の道を車で走りました。交差点に信号灯が出来たのはもっと後のことです。車も余り走っておりませんので名古屋も豊橋も短い時間で行くことが出来ました。

江戸時代岡崎は交通の要所で「吉良の塩」は舟で岡崎で陸揚げされ、馬で足助を経由して（中馬街道）信州に運ばれていきます。舟での運送は多量の物資を運ぶことが出来、海運で日本海・瀬戸内海を帆走する「北前船」は有名ですが、各藩の蔵屋敷のある大阪と遠州灘の難所を経て政治の中心である江戸を結ぶ海運は経済の発展に大きな寄与をしております。岡崎の八丁味噌で使われる大豆は三河湾の入り口で外洋船から川船に移され、矢作川から岡崎に運ばれております。

岡崎には塩座として国分家（伝馬・田町）が吉良の塩の専売権を持ち、東海の塩の権利を独占しておりました。慶長の頃、本多康重が矢作の大水の窮状を救うため直接「家康」から塩の専売の許可を受けた為と言われております。又、下肴町は城下町の・上肴町は伝馬宿の魚の市場として魚座として専売を許されております（現在の魚町は以前は下肴町）。石屋町（花崗町）は岡崎は良質な花崗石の産地であり、田中吉政が城郭を作るときに近江から職人を連れてきたと言われております。

伝馬の問屋場は宿場を運営する重大な任務を持っており－人馬継立て（勅使・公用旅行者・参勤交代・お茶壺道中・飛脚・おかげ参り・一般旅行者）の責任を持っております。宿場には本陣・脇本陣・旅籠・木賃宿等があり、街道には宿場以外に所々に茶屋もあり旅人の憩いの場所になっております。東海道では岡崎宿～藤川宿の間にあった「あわ雪茶屋」が有名で、様々な文献や芝居などにその名を見る事が出来ます。

このような江戸時代から明治・大正・昭和を経て、現在は「平成」の年号となりました。私どもは何回かの戦争･経済恐慌を経験し、明治維新から僅か百五十年経ただけで、

加速度的に社会環境は変わっております。人間の思想や道徳に進歩が無く、科学や戦争手段だけが発達していく世界はどんなふうになってしまうのでしょうか。それは過去の歴史を学ぶことによって、ある程度は変化に対して心構えが出来そうな気がします。「歴史はおもしろいし、もっと知りたい」、これが私のこの頃の心境であります。